

現場からのリアルな報告が、あすの 実践を元気づける

伊丸岡 圭 一

はじめに

会場が「かでる」となつてから、他の分科会の様子をのぞきづらくなつたので、ほかではどうだったのかわからないうが、今年度の書教育分科会には、二日間でのべ14名もの大学生が参加したことが、本分科会発足以来の特筆すべき「事件」であつた。いま、大学生たちはすこぶるまじめである。必ずしも書写書道教育に進むわけではないが、彼らの素朴な疑問にわれわれも原点に立ち返つた思いで討論に参加できたことは、大きな収穫であつた。

一方、教員は6名（いずれも高校。小中学校からの参加がないのが残念でもあり、積年の課題でもある）、市民の参加者としては学童保育指導員の方が1名であつた。

一 分科会の現状

本分科会の設立当初は、わずかながらも小学校の先生の参加、レポート提出があつた。しかし、その後長らく参加者のほとんどは高等学校教員が占め、いきおいレポート内容も、参加者のなやみ・課題の交流も、高校現場のものだけとなつていく。全国教研では「書写・書教育分科会」といつて、曲がりなりにも小中高現場の教員の参加が組織され、義務制から高等学校までの「書を通じて子どもたちをどう育てるか」という課題の追究を行っている。全道合研書教育分科会としても、これもとても大きな課題である。

一方、毎年この分科会には、多数の子どもたちの作品が並べられ、書教育の可能性、子どもたちの可能性がリアルに語られる楽しい分科会でもある。小中学校現場の先生方



そして書写・書教育に関心のある道民のみなさんが、来年度以降ぜひともこの分科会に参加していただけるよう期待申し上げます。

二 各レポートから

(1) 専門外教師の奮闘

北見緑陵高・森田氏は、三年前、書道専任教員転出後の後任者が、国語の免許しかなく困っていたときに、自身も免許外でありながら、書道を担当することになって、いわば同僚や生徒の危機を救ったという実践を報告した。

北見緑陵といえは、開校以来、音楽・美術・書道の芸術三科の専任教師がいて、3科合同発表会を開くなど、芸術科の充実した学校として聞こえていたが、「間口の調整弁」として翻弄され（最多期9間口から来年度4間口校へ）、芸術3科の専任確保が困難となり、3科の選択から音楽必修へと、教育課程の変更を余儀なくされる。

専門の先生が突如いなくなる、制度上選択できるはずの科目が、学校選択（必修）となる、といったことは生徒にとつての**不利益**、**学ぶ権利の侵害**である。

『魅力ある、特色ある学校づくり』というキャッチフレーズで、学校間競争をおおるだけあり、金と人を引き上

げていく、道教委のやり方に強い憤りを感じる。」全道の現場で奮闘する仲間の気持ちを氏は代弁している。

「書道」の免許外担当や、「国語」と「書道」の兼務問題。これらは、まぎれもなく道教委や校長の人事上の「不作為」である。こうした「悲劇」の例は、筆者らがこの分科会を設立した当時から数多く報告されてきた。適切な教員配置もできないで、なにか「教員評価」か、なにか「郷土や国を愛せ」か。教育条件の整備こそが教育行政推進の責任者としての本来業務ではないのか。本分科会としての切実な願いでもある。

(2) 転勤後の「もやもや」

苫小牧西高・磯角氏は今年度市内校を異動して感じたまざまを「転勤後の『もやもや』」と表してレポートした。いわく、

「一番頭を悩ませたのが2年生だった。前任者の授業内容がよくわからず、生徒に聞いてもあやふや。何をどこまで学習しているの



かよくわからないままの見切り発車だった。」

これは、筆者も体験のあることである。否、これまで異動するたびに体験してきた。なぜ、実施した学習内容や方法、使用教材、教科会計の記録などが残されないのだろうか。まったく初めての出会いの学年ならば、お互いにこんなものだろうと割り切れるだろうが、いわゆる「持ち上がり」

学年の場合は、ある程度の情報を引き継いで頂かないと、生徒にとつての学習の継続性が保障されないどころか、なにか断絶され、不完全なまま高校の書道学習を終えることとなってしまふ。これも前項に触れたように、広い意味では生徒にとつての「学習権の侵害」につながらないだろうか。筆者も、昨年異動した際には、いっさいの記録も何も残されておらずあらゆる場面で困った。「後任の先生には、新たなやり方で自由にやって頂きたい」ということらしかったが、それは聞こえのよい、責任放棄の詭弁と言つてしまえば言い過ぎか。

(3) 永遠に続くイス取りゲーム

札幌東陵高・小笠原氏は「今年の自分と授業作品」と題して、自身の近況や感想、生徒の実態や授業の工夫について、飾らない言葉で、淡々とレポートしていただいた。

1年生の40人授業、2年生の自詠短歌（五七五七七）の

書作品化など、様々な制約の中、できる限りの理想を追求して止まない姿勢に敬服した。

「精力的に子どもたちと関わろう：時間のほとんどを机間巡視&生徒との会話に費やし：2時間の授業が終わるとぐつたりで、『歌手がコンサートを終えたときの感覚ってこんなもののかな』」

札幌市内でも公立校の統廃合が進み、地域開放講座の実践、二年後の単位制への移行とカリキュラムの改変など、「特色づくり」競争、「生き残り」競争の渦の中に巻き込まれている。「結果」を出すことを求めていたら、生徒の顔が見えなくなっていることに気づく。以前は、「どこからでもかかってこい」という意識があったのに、いまは「ここからここまでの範囲の中で」認めよう、作らせようとしているのかもしれないと自戒する。非常にまじめな先生である。「特色ある学校づくり」競争と、生徒に結果を求め



競争させることは、ともに同じ本質を持つものなのではないかと、氏は指摘する。

討論の中で、「教員評価」「査定」が、必ずしも「学校の活性化」「職員の意欲・資質の向上」という、制度導入の「目的」を果たしてはいないことが話題になった。むしろ意欲をそぎ、諦めを植え付け、「管理職受け」するようなポジションばかりが評価され、少ないパイの奪い合い、やっと座れたと思ってもまたすぐに立たされる、「永遠に続くイヌ取りゲーム」だという青年教員層の嘆きには、教育委員会は真摯に耳を傾けるべきだろう。

(4) 複雑な教育課程の中で

芦別高・中谷氏の勤務校は、七年前に普通科の芦別高校と芦別総合技術高校とが合併した学校である。その総合技術高校は、芦別工業高校と芦別商業高校が統合した学校であった。地方都市における高校統廃合は、かつては職業高校どうしの合併が進められ、近年では普通科校と専門（職業）校との統合が珍しくない。そして、その際に総合学科へと転換する例も少なくない。

芦別高の場合、普通科4、情報ビジネス科1の計5間口の普・商併置校である。が、両科の生徒を混合した「ミックスホームルーム」という学級編成をし、かつ、授業は科

によつて異なるので、多くの授業がホームルーム単位ではできず、非常に複雑なカリキュラムおよび時間割編成となっている。おそらく統合当時の教員は知恵を絞り、教師の負担にも耐え、新しい芦別高校に通う生徒のために工夫したシステムであったろう。現在も多くの教員が最低4種類の科目、15時間ほどの授業を担当（氏は国語と書道で5種類）しているというから、ご苦労がしのばれる。

さて、そのような中、再来年度からの新教育課程の編成である。氏は、芸術・家庭科代表の委員として教育課程委員会に参加するが、国語科の議論にも参加する。単純に一つの教科の利害を主張すればよい他の教科代表と異なる、難しい立場に立たされることが多いのが、われわれ「国・書兼担」教員の辛いところである。

2学科生混在のミックスホームルームを維持しながら、できるだけホームルーム単位の授業（教科）も残したい、その上で各教科の理想とする科目の開設・学年配置・単位数の設定である。進路保障の観点も当然はずせない。芦別高の新カリキュラムは教育課程「表」だけの問題にとどまらない、多くの困難を乗り越えた、価値ある「学校づくり」の先進例となることだろう。

(5) あたらしい教材づくりの模索

筆者は東川高に異動して二年目である。先の磯角報告の「もやもや」をはじめ、どの報告者（レポート）にも共感するものがあつた。三年間で6単位の芸術必修、書道だけでも4単位。どのような教材単元の構成がいいのか、まだ確信が持てずにいるというのが正直なところである。

今回報告したのは、下の句カルタの「木札（取り札）」の教材化の試みである。勤務校では、一月下旬に全校カルタ大会が開催される。今度で第30回という伝統的生徒会行事。もちろん北海道特有の下の句カルタである。1年生の宿泊研修でも行われ、12月には生徒の「読み手」育成も行われる。筆者はもう20年以上も前から、この「取り札」の作品化を授業にて行ってきた。昨年現任校に転任してからは、この作品をカルタ大会会場に展示して好評を得た。半



切1/3判への臨書作品と、半紙作品を画用紙に転写した「紙刻字」作品である。この取り札の「元版」は、現在多く流通している任天堂版を使っているが、当

然のことながら生徒はそうやすやすとは読めない、書けない。そこでこの取り札「臨書」のためのテキストをつくらうと試みたのが今回のレポートであつた。来年、100枚の完成品をお目にかけることができれば幸いである。

前任校時代にも、地域教材、学園教材の収集、詩文集制作に力を入れてきたので、今後もう少し何かしらを形にしてゆきたいと願っている。これはとりもなおさず、生徒の真の意味での地域愛、母校愛の育成につながると思うからである。これらは二〇〇八年版の『北海道の教育』にも記載したが、後に再掲させていただきたい。

三 参加者・学生の声

レポートは無かったが、現職や学生たちの声を少し拾っておきたい。今後のこの分科会の方向を示唆するものもあると考える。

- ・小・中学校の実態と高校をどう結びつけるか、模索したい。
- ・なにか教材のアイデアを持って帰りたい。
- ・教材には「力」がある。





学校にとつて、生徒たちにとつて、書の授業が充実している、楽しい、必要だ、という声が多くなる仕掛けを私たちは工夫しなければならぬ。それは何も展覧会入賞の多寡ばかりではない。どんな様子の学校で、どんな日々の取り組みがなされているだろうか。

四 実践のヒントとまとめにかえて

- ・ 発表しながら気づくこともある。他の学校の生徒の作品を見て気づくこともある。年に1回こういうことをやらないと、心の運動不足になる。
- ・ 先生は、いろいろなことを考えながら授業を組み立てているのだなど。もっと、そう気づいて授業を受ければよかった。先生になつたら、いろいろと教材を発掘してみたい。
- ・ 高校時代にこういう授業に出会えていたら。現場の先生の生の声が聞けてよかった。
- ・ 年に1回、必ずおもしろいもの(教材)作ろうと思う。
- ・ 自分1人でやっているもやややすること多い。こういう場へ来ると、方向修正もできる。

また、教材開発、教材発掘を目的に参加される方も多い。参加者の声にもあったが、「教材には力がある」。生徒にとつて身近であったり親しみやすかったり、やりがいのある教材・単元の開発は、何にもまして大切だ。今後ともそうしたものを持ち寄りたい。

そのような観点から、以下をまとめとして、来年度の書写・書教育分科会の展開につなげていきたいと考えている。

- (1) 校内認知(同僚性と協業)の追求と、学外発信(校外展など)の追求を

- (2) 独自テーマ・教材の発掘・開発を

① 行事とリンクさせた作品づくり

よく見られるのが見学旅行とのリンクである。とりわけオキナワやヒロシマ・ナガサキといった平和学習を取り入れている学校では、書の授業とのリンクは容易である。ここでは旅行前からの事前指導や、ふだん取り組まないような、たとえば全紙や胸切などといったサイズに取り組ませると一層生徒の意欲喚起につながる。

② 学園教材

これは、たとえば校歌、校訓を作品にする。あるいは校門や敷地内の詩碑、記念碑など拓本に採るといったものである。これを、開校記念日近辺で廊下に展示などすれば、その日をただの休業日としか意識していない生徒、教職員にちよつとしたアピールも可能である。

③先輩や下級生にメッセージを贈る

筆者の前任校では毎年センター試験の60日ほど前に、2年生の書の授業で制作した「先輩へのエール」作品展を廊下で行う。また、年度末には入学後1年たった1年生に、まもなく入学してくる後輩たちに向けた「新入生へのメッセージ」作品を制作させ、同様に廊下に展示する。

④地域教材

北海道の「下の句カルタ」の取り札の独特の筆文字を臨書させ、さらに「紙刻字」させている。北海道特有の文化を認識させる。

⑤「ことば」の獲得の工夫

書はことばの表現である。表現する素材であることばを豊富に持つ生徒もいれば、そこでつまづいて前に進めない生徒もいる。そんなときのために、『書の創作のための詩文集』というものを作っている。

さまざまな詩文、童謡、道内ゆかりの詩歌、学校や地域に関わることば、さらには筆者の気に入ったことばなどを並べて毎年改訂を重ね、現在44ページ建てである。既存の詩集などを書道室に並べるのも効果的であるが、自校生専用の詩文集を持たせるというのも生徒は案外喜ぶものである。

(東川高校)